

鹿児島藩は何故263年もの長きにわたって琉球王国を支配できたのか？

～幕末雄藩誕生の条件・海洋アジアの薩摩と琉球～

古来、薩摩は海を舞台に発展してきた。黒潮と季節風によって結ばれた鹿児島・上海・福建・那覇は一辺800キロの菱形の頂点に位置する。古代九州では「遠の朝廷」大宰府の鴻臚館が国の外交機関であったが、海洋アジアの制海権があったわけではない。実態は迎賓館である。いっぽう海域をめぐる交易は弥生時代にはすでに遠隔地間に展開していた。沖縄のゴホウラ貝の腕輪半製品が薩摩半島中南部の高橋貝塚（南さつま市）に出土し、九州北部産のヒスイが南島で出土する。平安末には南島産の夜光貝の螺鈿が平泉中尊寺金色堂に2万枚も使われている。平家政権下には日宋貿易が大いに発展した。平氏の権力基盤は海上貿易にあったが、制海権は内海の瀬戸内海にしか及んでいない。九州の外洋には統制に従わない豪族が跋扈していた。南薩摩の大豪族阿多忠景に平氏は討伐軍を送るが「鬼界島」に逐電された。壇ノ浦の戦いや源義経の残党掃討も東シナ海という外洋の壁が立ちはだかった。鎌倉時代には元寇が二度あったにもかかわらず、商人や僧侶の往来は以前にも増して活発であった。これは何を物語っているのか？外洋を制圧することがいかに困難であったかということである。「灘」とは難所という意味である。菱形の一辺、那覇・鹿児島間には「海の墓場」と呼ばれてきた七島灘がある。口之島と屋久島栗生の間にある平瀬は大潮の時、鳴門海峡を凌ぐ渦潮になると海上保安部の職員から聞いたことがある。平均時速3ノット、深さ1000m、幅100kmの黒潮が平瀬を西から東へ横切っている。奈良時代に鑑真が6度目に坊津秋目に上陸できたのは、幸運というしかない。四つの船と言われる遣唐使船の生還率は75%に過ぎない。平安末に奄美人が九州北部で海賊行為を働いた仲間に他国の海賊も混じっていたであろう。後の時代にいう倭寇である。12～14世紀に徳之島で製作されたカムイヤキ（南島陶質土器）が沖縄の石垣島から北薩の出水まで大量に出土しているのには驚く。護送船団もいたはずである。徳之島に武装した船を描いた線刻画が残っているのも関係がありうる。このカムイヤキが15世紀に突然消滅するのは中国産の貿易陶磁が出現したからであろう。カムイヤキの産地は初め朝鮮と考えられていたが、焼き物技術の伝播があったのであろう。日明勘合貿易と倭寇の跋扈は同時代、同海域の出来事である。そして戦国時代末から朱印船貿易の全盛期を迎える。

室町時代に島津氏は日明勘合貿易の常連であった。理由は硫黄。薩摩産の硫黄は跳びぬけて上質であった。大正時代まで口永良部島は1ヶ年150万斤（900トン）産出していた。硫黄島は言うまでもあるまい。1451年日明勘合船の天龍寺第1船の積み荷ほとんどが硫黄であった（4万3800斤）。中国や朝鮮に産しない鉱物が薩摩のエース切り札であった。近世鹿児島藩は佐渡金山を上回る産金銀量を誇っていた。この時代はSulfur（硫黄）とGold（金）Rushの時代であった。

戦国時代、薩摩商人は石見銀山で銀を買い付け、琉球に運び、琉球商人が中国へ輸出した。中国の銀本位経済はこの交易で成り立っていた。石見銀山が世界文化遺産に登録されたのはこの銀が中国経済を支えていたからである。この時期島津氏は急速に琉球交易の独占を

強化していく。嘉吉元年（1441年）琉球国は足利将軍から与えられたものと唱え始めるのはその一環である。中国から島津氏に派遣された使節への贈り物は銀か硫黄であった。中世琉球と薩摩は善隣友好関係にあり、王国は「綾船」という正式な外交船を派遣していた。しかし豊臣秀吉の時代に島津氏は朝鮮侵略軍の軍役を琉球に転嫁し、琉球使節に無礼があったと詰問する。関ヶ原の合戦以降は、徳川氏に聘礼の使節を派遣しなかったと恫喝した。これが「聘礼問題」である。その行きつくところは琉球攻略であった。1601年関ヶ原西軍の敗将宇喜田秀家が島津氏を頼って薩摩に来た時も体よく桜島の後背地牛根に事実上軟禁しており、露見すると秀家を家康のもとに送還した。助命嘆願をしたのは島津家の武家の誉れのためである。秀家は琉球にわたり劣勢挽回の道を切り開こうとしていたとも言われている。島津氏がそれを許すはずはなかった。1606年に島津氏は「大島入り」の談合をしていたが、同年末には琉球攻略にすり替わっていた。初代鹿児島藩主家久の外交戦略であった。前太守島津義久は秀吉の軍門に下ったにもかかわらず、依然として1611年病没するまで外交権を握っていたと見られ、家久は藩権力を掌握するに至っていなかった。義久には譜代の重臣がおり、その権力基盤の一つは華僑商人との繋がりであった。島津氏発給の琉球渡海朱印状<sup>14</sup>のうちの<sup>12</sup>通は義久名義である。ルソン・カンボジア・ベトナム・タイの国王など南蛮へ使節を派遣している。中国とは「薩摩・福建コネクション」と言ってもよい長年の外交関係が確立していたとみてよいだろう。1601年島津義弘もルソンに交易をもちかけるなど、外交権をみるかぎり家久に藩権力が一元化しているとは言い難い。1607年には尚寧王を冊封する中国使節団が来琉していたので進攻は見送られていた1608年末には「琉球渡海軍衆法度」が決められ、翌年3月3000人が出兵した。軍役規定を上回る数になったのは、藩主家久・義久・義弘の独立した3軍団にそれぞれ志願兵が加わったためであろう。藩主家久は大御所徳川家康と将軍秀忠の許可を後ろ盾としていた。幕府は断絶していた日明国交を琉球に斡旋させることを島津氏に託したのである。島津家久は、進攻には消極的であった前守護・守護代の義久・義弘の隠然たる力を抑え、自らへ権力を一元化するため進攻は強行された。家臣にとって琉球侵攻は一種の踏絵、忠誠の証しであった。進攻が明国に知られてはならない。日明国交回復が水泡に帰すからである。まさに電光石火の鉄炮攻めであった。村々を焼き尽くし、4月には首里城を接收し、尚寧王以下の重臣たちが家康への挨拶に旅立たされた。

日明国交回復は不調に終わったが、琉球国は島津氏に与えられた。72万石は王国を含んでいる。しかし王国の9万石の軍役は免除され、王国は国際的には独立国として存続し続けた。これを「幕藩体制下の異国」と言い、263年もの長期に及んだ。それを可能にした条件は琉球港交易図屏風などの絵図を手掛かりにして解き明かすことができる。キーワードは昆布・俵物・木材・武器刀剣・鋳物・馬・黒糖・薬種などのグローバルな交易である。幕末日本が外圧に見舞われたとき、鹿児島藩が雄藩として台頭できたのは、琉球王国の存在を抜きにしては語れない。

- 絵図1 琉球交易港図屏風（浦添市美術館蔵）
- 絵図2 薩州国絵図（富山市金盛家蔵）・・・ 琉球船入口・硫黄山
- 絵図3 中城王子上国船行列図（尚古集成館蔵）
- 絵図4 琉球人行粧図（玉里文庫）①・・・ 正使琉球王子・楽童子・弁当隊
- 絵図5 琉球人行粧図（玉里文庫）②・・・ 斉興・斉彬が先導